

Leprosy-affected persons in North Africa : A literature review

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 若林, 佳史 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6773 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



北部アフリカにおけるハンセン病の捉えられ方と同病者の扱われ方：

文献综述

若林 佳史*

要 約

北部アフリカにおいてハンセン病はどのように見られ、同病者はどのように扱われてきたのか、それに触れた文献を概観した。しかし総じて文献は乏しく、病者や同治癒者、またその家族や医療従事者の心理社会面や健康教育面に焦点を合わせた基礎的な調査や研究が進められるべきと考えられた。

I. はじめに

ハンセン病に関して今後どのような心理社会研究また健康教育研究を推し進めればよいか、それを探るため、これまで中国、南アジア、東部アフリカ、西部アフリカ、中部・南部アフリカで行われてきた同領域での調査や研究を概観してきた(若林 2013¹, 若林 2014^{1,2}, 若林 2016^{1,3}, 若林 2017^{1,4}, 若林 2018^{1,5})。本稿においても同様にして北部アフリカで行われてきた同領域の調査や研究を概観するつもりであった。しかしそれらを扱った文献はほとんどないことが判明した¹⁾。そこで本稿においては北部アフリカにおいてハンセン病はどのように見られ、同病者はどのように扱われてきたのか、それを略記することにする。

ここで北部アフリカという語を用いたが、その範囲をめぐっては、スーダン共和国(以下、スーダン)を含めるか否か、モーリタニア・イスラム共和国(同、モーリタニア)を含めるか否か、といったように考え方¹⁾²⁾がいくつかあり、どの国とど

の国を北部アフリカとするか定まっているわけではない。これまでの拙稿(若林 2016, 若林 2017)でスーダンを東部アフリカ、モーリタニアを西部アフリカとしたことから、本稿ではこの両国を除き、エジプト・アラブ共和国(同、エジプト)、リビア、チュニジア共和国(同、チュニジア)、アルジェリア民主人民共和国(同、アルジェリア)、モロッコ王国(同、モロッコ)、そして西サハラを北部アフリカとする。ただし、上記の若林(2017)においてモーリタニアには触れることができなかったのもので、本稿で若干触れることにする。以上挙げた国々のうち、チュニジアとアルジェリアとモロッコはまとめてマグレブと呼ばれるが、これにリビアとモーリタニアを加えることもあり、この5カ国で「アラブ・マグレブ連合」を構成している。

北部アフリカは、イスラーム教徒が圧倒的に多く住んでいることから推測できるようにイスラーム世界の一部という性格を強くもっている。また北部アフリカのうち地中海に面した地域、言

*大妻女子大学 社会情報学部

い換えれば地中海南岸は、かつてローマ帝国の属州であったことから推測できるように、地中海世界の一部という性格も強くもっている。

なおモロッコ沖ないし西サハラ沖にマデイラ諸島とカナリア諸島がある。しかし前者はポルトガル領、後者はスペイン領で、両者ともアフリカの一部という性格はほとんどない。このカナリア諸島に属するテネリフェ島にはかつてハンセン病患者の収容所があったという (Vivancos et al 1987¹⁶, Campos 2003¹⁷, Adis & Ortega 2017¹⁸)。

II. 北部アフリカにおけるハンセン病ならびに同病者および療養所

本節では、北部アフリカ各国におけるハンセン病、同病者、そしてその療養所や収容所また病者村や病者居住地区などについて、断片的にはあるが、略記していくことにする。直近の有病率などについては、たとえば WHO による統計書を見ていただきたく思う。また療養所や病者村などについては、その一部にのみ触れることにする。

以下にハンセン病にあたる現地での呼称についても触れるが、正確に言えば、ハンセン病に類似した症状を示す別の病も同じ名称で呼ばれている可能性があり、くれぐれも注意していただきたく思う。

1. エジプト

カイロないしメンフィスあたりからナイル川の下流域を下エジプト、また上流域を上エジプトという。さらにアスワンあたりから上流の地域をヌビアという。

エジプトの人口の大部分はエジプト人によって占められるが、ヌビアにはヌビア人が住み、主に川沿いの土地で農耕や漁労を営んでいる。また西部のリビア国境付近にはベドウィンと呼ばれるアラブ系の人びとが遊牧で生計を立てている。さらに歴史的経緯から、アルメニア人やギリシャ人といった人びとも住んでいる。約9割の人がイスラーム教 (スンナ派)、約1割の人がコプト教を信じている。

正則アラビア語が公用語となっているが、日常生活ではアラビア語エジプト方言²¹⁾が用いられる。そのエジプト方言でハンセン病は、ラテン文字化すると、*guzam* という (Martin Hinds & el-Said Badawi 1986²¹⁻¹)。

エジプトに何千年前からハンセン病が存在したのか、それに関心がもたれ、主に二つのアプローチがなされてきた。その一つは、パピルスに残された記述からハンセン病の存在を探ろうという試み (Browne 1974²¹⁻², Nunn 1997²¹⁻³) であり、もう一つは、発掘された骨やミイラから同病の存在を探ろうという試み (Smith & Derry 1910²¹⁻⁴, Møller-Christensen & Hughes 1966²¹⁻⁵, Dzierzykraj-Rogalski 1980²¹⁻⁶, Sandison & Tapp 1998²¹⁻⁷) である。しかしいずれのアプローチからも、たとえば紀元前数千年といった古い時代にハンセン病が存在したという明確な証拠は得られていない。もちろん証拠がないからといって同病が存在しなかったと言うことはできない。

上記の問題とも関連し、エジプトにどこからハンセン病がもたらされたのかという問題についても関心が持たれ、おおまかには二つの推測がなされている。その一つは、ベルシャあるいはインドといった東方から、もう一つは、スーダンやエチオピアといった南方から、という推測である。これについても明確な解答が得られているわけではない。

エジプトは、紀元前4世紀からギリシャ系の王朝によって支配され、次いで紀元前1世紀からはローマ、また4世紀からはいわゆる東ローマの支配下にあった。きわめて大雑把に言えば、この間に多くのギリシャ人が入植し、また多くのギリシャ人やユダヤ人の学者がアレクサンドリアに滞在した。こうしたことからわかるように、少なくともアラブ・イスラーム勢力に支配される7世紀まではギリシャおよびローマの文化圏にあった。この時代に使われた、ハンセン病と関連するかもしれない病的状態を表すギリシャ語またラテン語の言葉として、「フェニキア病 (*φοινικία νόσος, nouisos phoeniki*)」, 「レブラ (*λέπρα, lepra*)」, 「アラブのレブラ (*lepra Arabum*)」, 「象

病^{*2-2)} (*ἐλεφαντίασιν, elephantiasis, elephas morbus, elephantia*), 「ギリシャの象病 (*elephantiasis Graecorum*)」, 「獅子病 (*leontiasis*)」, 「色情症 (*satyriasis*)」というものがある。これらのうち, 「アラブのレブラ」「ギリシャの象病」はそれぞれ「アラブ人のいうレブラ, ないしアラビア語でいうレブラ」「ギリシャ人のいう象病, ないしギリシャ語でいう象病」という意味と考えられる。そしてたとえば, ローマの詩人・哲学者のルクレティウス (Titus Lucretius Carus, 紀元前 99 年頃-55 年) はその書『事物の本性について²⁻¹⁻⁸⁾』において「象病 (*elephas morbus*) というものがある。それはナイルの流れのほとり／中部エジプトで発生し, その他では決して発生しない」と記している。またローマの博物学者の大プリニウス (Gaius Plinius Secundus, Pliny the Elder, 西暦 23 年-79 年) はその書『博物誌²⁻¹⁻⁹⁾』において「象病 (*elephantiasim*) はイタリアに持ち込まれた」と記している。あるいはペルガモンに生まれアレクサンドリアなどで医学を修め, ローマで活躍した医師のガレノスないしガレヌス (西暦 129 年頃-200 年頃) は『ヒポクラテス術語解²⁻¹⁻¹⁰⁾』のなかでヒポクラテス (紀元前 460 年頃-370 年頃) のいうフェニキア病はフェニキアおよび東方の病気で, 象病のことである, また『グラウコンのために 治療法について²⁻¹⁻¹¹⁾』のなかで「象病はアレクサンドリアにて多い」「象病の治療には, 毒蛇の肉を, オリーブ油とニラとイノンドとともに煮て, 食べるのがよい」と記している。以上挙げた様々な病とこんにちのハンセン病との一致・不一致については古来込み入った議論がある。単純に述べることはできないが, この時代に象病と呼ばれた病気は, 多くの場合, らい腫型ハンセン病, またレブラと呼ばれた病気は広く様々な皮膚病を意味する, というのが今日広く受け入れられている説である。

なお, 後に象病と呼ばれるようになる病態に最初に言及したのは, エラシストラトス (前 304-前 250 年頃) の秘書にして生徒で, アレクサンドリアにいたストラトン (Straton) だとされる (Grmek 1983²⁻¹⁻¹²⁾)。彼は *kakochymia* (*cacochymia*; *kako* な

いし *caco* は悪い, *chyme* は体液, *ia* は症の意で, 「悪体液症」と説明している。

上述したようにガレノスは毒蛇の肉を用いた治療法を提示したが, ガレノス以外にも, アレタイウス (Aretaeus), オリバシウス (Oribasius), アイギナ (エギナ) のパウルス (Paulus of Aegina) らが毒蛇を用いた治療法について述べており (Holman 1999²⁻¹⁻¹³⁾), そうした治療法が実際に行われていた可能性がある。またこの治療法には, アスクレピオスの杖に蛇が巻きついていることから推測されるように, 蛇に何らかの力があると思われる。見るギリシャ人の考え方が関係しているのかもしれない。

ここで, エジプトにおける病者の収容所あるいは保護施設などに触れておきたいと思う。

どこまで史実かわからないが, 紀元前 3 世紀初めころに神官マネト Manetho がギリシャ語で書いた『エジプト史 (*Αἰγυπτιακά*)』の中に「穢れた者を一掃するため, レブラ *λέπρα* を患っている者をナイル川の東側の採石場に追いやった。さらにアウアリスという町に住ませた」という一節がある (正確に言えば, 『エジプト史』は現存せず, その断片が後代の著述家の文章の中に引用されて残っているに過ぎない。その一つが西暦 1 世紀のユダヤ人フラウィウス・ヨセフス (Flavius Josephus) が記した『*Contra Apionem* (アピオンへの反論)^{2-1-14, 2-1-15)}』(I, 26-31) の中におけるものである。ただしヨセフスがマネトの記述をそのとおり引用したという保証はない)。

そして話は, 略述すると, 「レブラを患っている者の中にオサルシフォスという名の祭司 (のちにモーセと呼ばれるようになる) がおり, 彼らの頭領となり, 彼らを指揮してエジプトと戦い, 最終的にエジプトから追い払われた」と続く。マネトの時代, ユダヤ人に対する反感があり, オサルシフォスたちは穢れた者であるということ強調するために, レブラが持ち出されたという感を与える。ただし先に述べたようにレブラがハンセン病を意味するわけではない。

次いで 5 世紀から 6 世紀にはアレクサンドリアその他の地に病者の収容所ないし保護施設があ

り、その設立ないし運営にキリスト教修道士が係わっていたことが明らかになっている (Miller & Nesbitt 2014²⁻¹⁶)。しかしアラブ・イスラーム勢力に征服された7世紀以降のことはよくわからない。

20世紀に入ってからの状況も、必ずしも明確というわけではない。*Journal of Tropical Medicine and Hygiene* 40巻 (1937) の Leading article²⁻¹⁷によれば、1928年にアレクサンドリア近くのベヘラ (Behera) に Neshu el Bahari 療養所が、アレクサンドリアのギリシャ病院に特別棟 (pavilion) が設置されたという²⁻³)。一方 Dalgamouni (1938)²⁻¹⁸によれば、1929年にカイロに外来診療所、1930年に同診療所に入院施設、1930年から1931年にかけて下エジプトと上エジプトにさらに計4つの外来診療所、1933年にカイロ近郊に Abu Zaabal 療養所が設置されたという。現在同療養所に隣接する Abdel Moneim Riad village には治療を終えた人たちが暮らしている。1979年以降そうした人々への支援をカリタス・エジプト (Caritas Egypt) が担っている (Garas 2000²⁻¹⁹)。また入所者の暮らしは Wiens (2009)²⁻²⁰ で若干知ることができる。そのほか WHO の会議録 (1988)²⁻²¹によれば、アレクサンドリアに近いアムレイヤ (Amreya, Amria) に1946年設立の療養所もあるという。同療養所には、現在、治癒したものの家に帰れない高齢者が住んでいるようである。

なおハンセン病患者を扱った映画として *Yomeddine* (監督 A. B. Shawky, 2018年) がある。幼いころに病を得て療養所の門前に棄てられた主人公が、中年になって父を探しにエジプトを旅するという話である。病者に対する家族や社会の態度をうかがい知ることができよう。

WHO の制圧基準は1994年に達している。

2. リビア

もともとベルベルと総称される人びとが住んでいたが、7世紀中ごろからアラブ人が入り込み、現在ベルベル系の人びとはわずかに、北部のトリポリタニア海岸平野の一部と、西部のアルジェリアにまたがった地域、そして南部のチャドとスーダンにまたがった地域にいるにすぎない。

公用語は正則アラビア語だが、日常生活ではアラビア語リビア方言が用いられる。

現在リビアにおいてハンセン病患者は少ないようで (Toweir & Chaudhary 2000²⁻²¹)、わずかな臨床的研究を除き、病者の生活をうかがい知ることのできる文献は見当たらない。

1969年に革命が起きるまで、「マリアの宣教者フランシスコ修道会」の修道女が療養所でのケアに関わったようであるが (Garuana 2014²⁻²²)、その後のことはよくわからない。

3. チュニジア

他のマグレブ地域と同様に、もともとベルベルが住んでいたが、現在ベルベル系の人びとはわずかに南部の乾燥した山岳・丘陵地帯とガベス湾のジェルバ島に住むにすぎない。日常生活ではアラビア語チュニジア方言が用いられるが、1881年から1956年までフランスの保護領だったこともあり、都市部ではフランス語²⁻⁴)も通用するとされる。

チュニジアにおけるハンセン病の歴史やかつてのハンセン病患者の様相を扱った論考としては、Ahmed Ben Miled (1980/2012)²⁻³⁻¹、Nouri et al (1986)²⁻³⁻²、Djelloul (2009)²⁻³⁻³ など、比較的多くのものがあり、それぞれ参考になる。また碩学 Dols の一連の論考 (Dols 1979²⁻³⁻⁴, 1983²⁻³⁻⁵, 1987²⁻³⁻⁶) は中世イスラーム社会におけるハンセン病患者の様相を知る上で極めて有益なものである。それらによると、温泉が効くと信じられ病者は温泉場 (ハンマ *hamma*) に集ったという。またケルアン、スース、スファックス、チュニスといった大きな町にはディムナ (*dimna*) と呼ばれる病院があったが、離れたところにはハンセン病患者の部屋があり、「屋根付き回廊の一つからそこへ行くことができるようになっていた」(Hakim 1988²⁻³⁻⁷) という。ただしこのディムナという語だが、もともと西暦830年ころにケルアンの大モスク近くのディムナ区に建てられた病院がディムナ病院と呼ばれるようになり、その後チュニジアで建てられる病院は同様にしてディムナと呼ばれるようになっていったという経緯があるらしく (Hamarneh 1962²⁻³⁻⁸)、幅

広い意味をもち、病院様の施設を指すこともあれば、病者（とりわけハンセン病者）の居住区を指すこともあったようである。一方「病者地区 (*rabd al-mardha*；ここで *rabd* は市壁の外側の地区、*mardha* は病人)」という言い回しもあったようである。市壁の外側で病者が集まって暮らす一画を、ディムナと呼んだり、「病者地区」と呼んだりののであろうか。ディムナというだけでハンセン病者の住むところ、*mardha* というだけでハンセン病者を意味するようになった可能性もあろう。

なお、ラザレットと呼ばれる施設もあったようであるが (Montague 1973²³⁻⁹)、これはハンセン病者の施設ではなく他国から来た者の一時隔離施設であろう。

マグレブ地域の中では、モロッコとならび病者が多かったようである。1906-1907年の調査によれば、マルタ人やフランス人、イタリア人やシシリア人やユダヤ人の病者もいたようである (Gaumer 1989²³⁻¹⁰)。病者地区で、ヨーロッパ系の人びととアラブ系の人びととユダヤ系の人びととがどのように住み分けていたのであろうか。

4. アルジェリア

他のマグレブ地域と同様、もともとベルベルが住んでいたが、現在ベルベル系の人びとはわずかに山岳・丘陵地帯と砂漠のオアシスに住むにすぎない——たとえば、テル・アトラス山脈のカビリー地方にはカビール人（ベルベル語の一つであるカビール語を話す）、オーレス山地にはシャウィーア人（同じく、シャウィーア語を話す）、サハラ砂漠のオアシスにはムザブ人（同じく、ムザブ語を話す）、そしてマリ、ニジェール、リビア、ブルキナファソにまたがってトアレグ人（同じく、トアレグ語を話す）。

フランス保護領時代にはヨーロッパ系の入植者も総人口の1割以上いたが、アルジェリア独立後にそのほとんどがアルジェリアを去ったという。また相当古い時代から都市部にはユダヤ人もまぎって住んでいたが、イスラエル建国後、そのほとんどが去ったという。

日常生活ではアラビア語アルジェリア方言が用

いられるが、フランス語も通用するとされる。

ローマ帝国の時代、現在のチュニジア生まれで、サレルノで医学校の教師を務めた医師コンスタンティヌス・アフリカヌスも、現在のアルジェリア生れで、ローマで活躍した医師カエリウス・アウレリアヌスも象病について記したとされるが、それぞれチュニジアやアルジェリアにいたときから同病のことを知っていたのか、それともサレルノやローマに行ってから知ったのか、よくわからない。

アルジェリアにおけるハンセン病者についてわかっていることは総じて少ない。20世紀始めころの文献がいくつかあり (Gemy & Raynaud 1897²⁴⁻¹, Montpellier 1918²⁴⁻², Raynaud 1925²⁴⁻³)、当時は病者がいたようであるが、現在はほとんどいないようである (Boudghene-Stambouli & Merad-Boudia 1989²⁴⁻⁴)。

なお、上述の20世紀はじめころの文献には「真の *lépreux*」という表現が散見され、梅毒とハンセン病との混同があったようである。

5. モロッコ

もともとベルベルと総称される人びとが住んでいたが、7世紀以降にアラブ系の人びとが侵入し、現在ベルベル系の人びとはわずかに山岳・丘陵地帯に住むに過ぎない——たとえば、リーフ山地や中部アトラスの北部またオート・アトラスの東部にタリフィート語（タリフィット語、リーフ語）を話す人びと、中部アトラスまたオート・アトラスの中央部にタマジクト語を話す人びと、そしてオート・アトラスの西部にタシルハイト語（タシュリヒート語、シルハ語）を話す人びと。それでもベルベル語を用いる人の数はマグレブ地域でもっとも多いとされる（モロッコでは全人口の30%、アルジェリアでは18%、チュニジアでは1%程度）。彼らは山中では半遊牧や移牧、谷底ではそれに加え農耕を営んでいる。

日常生活ではアラビア語モロッコ方言が用いられるが、特にフランスの保護領となった地域ではフランス語も通用する。

そのアラビア語モロッコ方言でハンセン病は

jdām (Marie 1935²⁻⁵⁻¹) ないし *zdam* (Harrell 1966²⁻⁵⁻²) という。いっぽうベルベル語で「*lèpre* ハンセン病」にあたる語は存在しないという (Ministère de la santé, Royaume du Maroc²⁻⁵⁻³)。

モロッコにおけるハンセン病については、病者が目に付きやすかったためか、病者に関するアラブ人による文書が残されているためか、それとも19世紀ごろから、モロッコを訪れた、特にフランス人による著作——たとえば Raynaud (1902)²⁻⁵⁻⁴——が残されているためか、よくわからないが、比較的多くのことが明らかになっている。また1930年代以降の各病院における入院病者数も *Bulletin de L'Institut D'Hygiène du Maroc* にて知ることができる。以下に、主にモロッコ保健省 (Ministère de la santé, Royaume du Maroc) の資料、そして並里・小川 (1998)²⁻⁵⁻⁵、笹川 (2015)²⁻⁵⁻⁶ をもとにまとめる。

- ❖ハンセン病者に関する最も古い記述はアラブ人地理学者エル・ベクリ (al-Bakri)²⁻⁵⁻⁷ によるものである。モハマド・イブン・ユーセフ (Mohammed Ibn Youssef, 904-973) の記述を引用して1065年に記した文章によれば、シジルマサ (Sijilmassa) で「病者は糞便清掃の仕事をしている」という (ただし、本当に今日言う「ハンセン病」者なのか疑問は残ろう)。
- ❖マラケシュやフェズやエル・ジャディダには病者が集まって住む一画 (ハーラ²⁻⁵ あるいはハラート) があった。そうした一画に関する最も古い記述は16世紀のアル・ハッサン (al-Hassan, 別名レオ・アフリカヌス Leo Africanus²⁻⁵⁻⁸) によるものである。略述すると、「*djden* を患った者 (*modjdun*) は、市を取り囲む壁の外にある専用の一画に住み、市の中に入ることは許されない」という。マラケシュのものはドゥカラ (Doukkala) 門の近く、フェズのものは墓地とギッサ (Guissa) 門の間にあった。Lambert (1868)²⁻⁵⁻⁹ が残したマラケシュの地図 (図1) にはその一画が描かれている。
- ❖マラケシュの7聖人の一人スィーディー・ユースフ・イブン・アリー (sidi Youssef ben Ali, ?-1196 または 1197) はハンセン病を患い、洞窟

に住んでいたという。

- ❖シェイク・ダウド・エル・アンタキ (Cheikh Daoud El Antaki, アンテリオキアのデイヴィッド) は1555年に著書 *Tadkira* のなかで、獅子病、象病、ザリガニ病の3病型に分けた。
- ❖ダウド・エル・アンタキによれば、ハンセン病の治療としては次のようなものがある。
 - ・らい腫のスカリフィケーションとタールの膏薬
 - ・カエルのスープ
 - ・ごまやフェスグリークの摂取
 - ・夾竹桃の葉の煎じ汁を用いての皮膚病変の摩擦
- ❖そのほかモロッコで次のような治療も行われた。
 - ・温泉ないし鉱泉治療 (特にムーレイ・ヤコブ温泉が効くという)
 - ・紅サルサパリラの根
 - ・亀の乾燥血液
- ❖フランス領モロッコじゅうに多くの病者がいたが、とりわけスペイン領モロッコと接する北部とドゥカラ人の住む南部に多かった (Marie 1935²⁻⁵⁻¹)。
- ❖スペイン領モロッコについての文献は Toro Cano (1935)²⁻⁵⁻¹⁰、Conillera (1962)²⁻⁵⁻¹¹、Cuadras (2014)²⁻⁵⁻¹² などわずかしかない。それらによると、ハンセン病の治療施設が1942年にアライシュ (Larache) に建設されたという。また住民 (ベルベル系であろう) は知識が乏しく、病名を聞いても恐怖を抱かないという (Toro Cano 1935)。
- ❖1952年にカサブランカに国立ハンセン病センター (Centre National de Leprologie: CNL) が設立され、さらに1960年に同センターがエル・ハンクからアイン・シヨクに移されて以来、ここが活動の中心となった (エル・ハンクには1913年設立の *lazaret* があった)。国内に分散する15個所の施設 (Service Regional de la Lepre: SRL と Service Provincial de la Lepre: SPL) が、治療中の患者や、患者家族の追跡調査、新患者発見活動等の基地となった。

- ❖ フランス領モロッコのハンセン病対策は、フランス人医師ルネ・ロリエ (René Rollier) の貢献による。
- ❖ 独自の多剤併用治療 (PCT) が行われた。
- ❖ 国内の NGO (AMAAF) が患者と患者家族の生活全般を援助し、彼らの社会的地位の向上に貢献した。
- ❖ 1990 年代の半ばに、WHO の基準を達成した。

6. モーリタニア

北部の砂漠地帯にはアラブ人とベルベルの混血のムーア人 (モール人)、また南部の、セネガル川下流域にはウォロフ人 Wolof、同中流域にはトゥクロール人 Toucouleur、そしてマリとの国境地帯にはサラコレ人 Sarakole (ソニンケともいう) が住む。

公用語はアラビア語で、日常場面ではアラビア語ハッサーニーヤ方言が用いられる。そのほか各部族で、ウォロフ語、フルフルデ語、ソニンケ語が用いられる。ソニンケ語で、ハンセン病は *sàahí* ないし *sàafi*、同病者は *sàahinté* という (Ousmane Moussa Diagana 2011²⁻⁶¹)。

ハンセン病の現状に関するものとしては、政府による発表と、援助機関であるマルタ騎士団による記事 (たとえば、Sovereign Military Hospitaller Order of St. John of Jerusalem of Rhodes and of Malta 2019²⁻⁶²)、わずかな症例報告以外には見当たらない。Delinotte (1939)²⁻⁶³ によればモーリタニアにおいて病者は少なかったようである。現在も少ないようであるが、スペインで見出された病者のうち、モーリタニア出身者もいるようである (Ramos et al 2016²⁻⁶⁴)。

Ⅲ. 北部アフリカのハンセン病者の文化的・社会的環境

1. ハンセン病の病因論ならびに伝統的治療

本節では、北部アフリカないしマグレブの人びとにおけるハンセン病の原因論と治療論について見ていきたいと思う。

まず原因論だが、他のアフリカ地域でよく見ら

れる、ナマズ^{*3-1} やブッシュバックやヤギの肉を食べるとハンセン病になるといった考え方は認められなかった。当地の医学的知識および医術は、おそらくは、主にギリシャの四体液説を始めとする医学とイスラームの伝統医学および「預言者の医学」、そしてベルベル系の人たちの諸知識とイベリア半島からやってきた人たちの諸知識を背景としたものと推測されるが、目立ったハンセン病の原因論が現在認められないというのは、そもそも原因論がなかったということなのか、それとも四体液説や「預言者の医学」といった教えが強く浸透し、民衆レベルでの原因論が吹き飛ばされたということなのか、よくわからない。

唯一認められたと言ってよい原因論は、ヤモリを原因とするものである。たとえば、14 世紀のエジプトの動物学者アル・ダミリ (al-Damiri, 1344-1405) はその著作『動物誌』のなかで、ヤモリが塩に付けた唾液 (あるいは吐き出したもの) から、white leprosy を引き起こす物質ができると記しているという (Flower 1933³⁻¹¹) ——white leprosy は今日のハンセン病と異なる可能性が高いが、念のため記しておく。現代でもエジプト人の間で、いくつかバリエーションがあるが、ヤモリの尿のかかった塩を摂ると体じゅうにそのヤモリと同じような茶色と黒色の発疹が生ずる、妊娠中にヤモリ (bors) を見ると皮膚に黒色の斑点のある子が生まれると考えられているという (Cottam & Cottam 1923³⁻¹²)。またヤモリに触れると、ハンセン病に罹ると考えられているという (Hansen 2003³⁻¹³)。

北部アフリカではないが、チュニジアに程近い地中海のマルタ島でも、ヤモリはハンセン病を移すという民間の考え方があったという (Despott 1915³⁻¹⁴)。ヤモリとハンセン病との結びつけは広範囲^{*3-2} に及んでいる可能性がある。

ちなみにイスラーム教ではヤモリを殺すことがすすめられているらしい (日本語訳サヒーフ・ムスリム 5560-5566 では「やもりは殺すのがよい」となっている)。こうしたヤモリの危険視と、ハンセン病のヤモリ原因論との関係はよくわからない。

次に、民衆レベルの治療法としては、上記のモロッコの項で述べたように、紅サルサパリラの根や亀の血液を用いるものがあつたようである。しかしその理論的背景についてはよくわからない。ちなみに亀の血はイボ wart に効果あると信じられているという (Jackson 1809³⁻¹⁵)。いっぽうで陸亀の尿や血に触れるとイボが生じるとも考えられているという (Westermarck 1926³⁻¹⁶)。

また上記のエジプトの項で毒蛇³⁻³⁾の肉の使用について触れたが、アンタキは「死んだ蛇の皮を埋め、そこから生じた蛆虫を食べる」という治療法があつたことを記しているという (Gadelrab 2010³⁻¹⁷)。これについてもその理論的背景はわからない。

さらにエジプトでは、火にあぶって乾燥させたサソリの頭を食べるといふ治療法もあつたようであるが (Walker 1931³⁻¹⁸)、これもよくわからない。

2. 病者の隔離

先に述べたように、チュニジアやモロッコの都市部で、指定された「病者地区」やハーラないしハラトと呼ばれる一画があつたことがわかっているが、それ以外の地域ではどうだったのか、詳細は不明である。また病者がどのような家に住んでいたか、それに関する論文もほとんど見当たらない。チュニジアでは小屋に住む病者が69.3%、飲料水も電気も恵まれていない病者が80.8%いる——要するに居住環境はよくない——という調査 (Jomaa 1986³⁻²¹)があるくらいである。もっともエジプトにせよリビアにせよ、収容所ないし療養所があり (ないし、あつて)、病者は修道女のケアを受けていたということから、病者が地域社会でどのような存在であつたのか推測することはできよう。

なお下エジプトのガルビア (Gharbia) では、ハンセン病者は、重度の障害を持っている場合でも、家族や地域の人に受け入れられているという (Mohareb et al 1992³⁻²²)。これまたほかの地域ではどうであつたのかわからない。

3. その他

これまでの拙稿で「病者の葬り」「ハンセン病者に関することわざや民話」についても概観してきたが、これに該当する文献は見当たらなかった。

以上本節をまとめると、ハンセン病者また同治癒者がどのような暮らしをしているのか、家族や地域の人からどのように扱われている (きた) のか、それを正面から取り上げた論考は乏しい。こうした基礎的な事柄を明らかにすることが必要であろう。特に療養所やコロニーに治癒はしたものの故郷に帰れない人びとが多くいるようであり、彼らを対象とした調査や研究が必要であろうと考えられた。

IV. 北部アフリカのハンセン病者を対象とした精神医学的研究

これまでの拙稿においてハンセン病者および同治癒者の「精神症状・精神的健康」「知識・態度・行動・社会とのかかわり」「受診と治療」「心理的問題への心理的・教育的介入」「女性の問題」を扱った調査や研究、ならびに「医療・保健従事者を対象とした調査や研究」「一般の人びとを対象とした調査や研究」について概観してきた。しかしこれに該当する文献はほとんど見当たらなかった。

認められたのは、男性ハンセン病者40名に精神科診断用構造化面接 (SCID) と、ベック不安検査およびベック抑うつ検査を行うとともに、遊離テストステロン値を測り、不安症状のある者は50%、抑うつ症状のある者は32.5%、そして混合性不安抑うつ障害の者は30%と高率であるが、変形度や病気の期間と不安・抑うつとの間に関連はないということを示した Dessoki et al (2018)⁴⁻¹¹のみであつた。

病者や治癒者ら、また彼らの家族や医療従事者また地域の人々の心理社会面や健康教育面に焦点を合わせた基礎的な調査や研究が進められるべきと考えられた。

V. 結 語

北部アフリカにおいてハンセン病はどのように見られ、同病者はどのように扱われてきたのか、それに触れた文献を概観した。しかし総じて文献は乏しく、病者や同治癒者、またその家族や医療従事者の心理社会面や健康教育面に焦点を合わせた基礎的な調査や研究が進められるべきと考えられた。

【注】

- *1-1) なぜ心理社会研究や健康教育研究の文献がないのか、それ自体が考究を要するテーマである。いろいろの可能性が考えられるが、ここでは踏み込むのを差し控えたい。
- *1-2) 地域の分け方には、そのほかさまざまなものがある。たとえば WHO はパキスタンからモロッコまでをまとめ、「東地中海地域」としている。またユニセフは、アラブ首長国連邦、アルジェリア、イエメン、イラク、イラン、エジプト、オマーン、カタール、クウェート、サウジアラビア、シリア、ジブチ、スーダン、チュニジア、バーレーン、パレスチナ、モロッコ、ヨルダン、リビア、レバノンを含め、「中東・北アフリカ地域」としている。あるいは世界銀行は、アラブ首長国連邦、アルジェリア、イエメン、イスラエル、イラク、イラン、エジプト、オマーン、カタール、クウェート、サウジアラビア、シリア、ジブチ、チュニジア、バーレーン、マルタ、モロッコ、ヨルダン、ヨルダン川西岸・ガザ地区、リビア、レバノンを含め、「中東・北アフリカ (MENA)」としている。
- *2-1) アラビア語には (アル) フスハーと呼ばれる正則アラビア語と、(アル) アーンミーヤと呼ばれる方言 (口語、通俗語) がある。
- *2-2) 西洋語には elephantiasis, leontiasis, ichthyosis, sauriasis といったように、動物の名を冠した病名がいくつかある。日本語訳あるいは中国語訳では通例、原語にはない、それぞれ、皮、顔、鱗といった語を加え、象皮病、獅子顔症 (獅子面症)、魚鱗癬、鱈魚皮様とされる。しかしたとえば elephantiasis という病名だが、なぜ象が持
- ち出されたのであろうか。「象の皮膚のようになるから」「象の足のように指がないように見えるから」「象のように重かつ大な病だから」といったさまざまな可能性が考えられる。そこで本稿では、あえて「皮」をとり、象病と記す (Skoda 1988⁵⁻¹ も参照してほしい)。
- *2-3) *Bulletin de la Léproserie de Neshu El Bahari (Behera) ET DU SERVICE DES LÉPREUX, SOIGNÉS A LA CONSULTATION EXTERNE DE L'HOPITAL DE LA COMMUNAUTÉ HELLÉNIQUE D'ALEXANDRIE* という雑誌が発行されていたことから、Neshu El Bahari 療養所とアレクサンドリア・ギリシャ病院との間には何らかのつながりがあったと推察される。一方、両者と、カイロの診療所や Abu Zaabal 療養所との関係はよくわからない。エジプトにおける、アレクサンドリアのギリシャ人社会の特殊な位置が関係していたのだろうか。Neshu El Bahari 療養所にはどのような人たちが入所していたのだろうか。
- *2-4) ここで、フランス語圏で用いられる (ないし用いられた) ハンセン病と関連する語について簡単に触れておきたいと思う。まず同病を指す語だが、これについては、インド・ヨーロッパ祖語の *lep- にまで遡ることができるラテン語 lepra に由来する lèpre が広く用いられる。また特に中世においては、聖書中の人物ラザロ Lazarus に由来する ladrie, また「哀れ」を意味するラテン語の名詞 miser に由来する mesellerie も用いられた。今日では maladie de Hansen という言い方も用いられる。第二に同病者を指す語だが、これには、ラテン語 leprosus に由来する lépreux が広く用いられるが、特に中世においては、Lazarus に由来する ladre (Lazarus > lasdre > ladre と変化)、「哀れな人」を意味するラテン語 misellus に由来する mesel もあった。これらの語には微妙な意味合いの違いがあるらしく、たとえば, ladre には、同語にはけちん坊という意味もあることから推測できるように、否定的な意味合いが、いっぽう mesel には、同情や慈善の対象といったように、肯定的な意味合いがあるようである。第三に同病者の病院や療養所あるいは収容所を表す語だが、これには、ラテン語 leprosarum に由来する léproserie が広く用いられる。また同じく中世においては、上記 ladre に由来する ladrerie、「病気の」という意の malade

に由来する *maladerie*, そして同語が上記 *ladrerie* の影響をうけ変化してできた *maladrierie* もあった。ここで, *maladerie* だけでハンセン病者療養所を意味するようになっていったのは興味深い。同病を直接指す *lèpre* や *ladrie* に由来する語が避けられた可能性もあろう。そのほかかつては, ベネチアの Santa Maria di Nazareth 島(同名の教会があったことからこう呼ばれる)に建てられた隔離施設が, 現地ベネチア人によって Nazareth の N と Lazarro の L とが入れ替えられてイタリア語で *lazzaretto* と呼ばれるようになり, この語に由来するフランス語 *lazaret* も用いられた。この *lazaret* という語は検疫所や一時的隔離施設を指すことが多いが, この隔離施設にハンセン病者が収容されることもあったようで, 語は単純ではない。なお英語には, フランス語の *léproserie* にあたる *leprosarium* のほかに, フランス語の *ladre* にあたる *lazar* という語を用いた *lazar house* (*lazar* を収容する施設) という言い回しもあった。*lazar house* と *lazaret* は, 綴りの上では似ているが, 成り立ちはまったく異なる語のようである。

*2-5) ラテン文字化すると *hara* ないし *harrah* あるいは *harat*, 一画や居住区や共同体を示すアラビア語で, 「街区」と訳されることがある。たとえばユダヤ人街区は *harat al-Youd* (あるいは *Yahud*, *Yahoud*, *Zoud*), キリスト教徒街区は *harat al-Nasara* という。マハッラないしマハレ (*mahalla*, *mahallat*, *mahalle*) ともいう。似た語にメラー (*mellah*) があり, モロッコではこの一語だけでユダヤ人街区を意味する。またラバド (*rabd* ないし *rabad*) という語もあり, これは市の発展に伴い市壁の外側にできた居住区を意味する(「城外街区」と訳されることがある)。ハキーム(Hakim 1988)によれば, ムスリム・スペインではハンセン病者地区のような一画を指すときにも用いられたという。

*3-1) Silla (1998)⁵² は古代エジプト人の中で魚食の回避があったと記している。しかし今回調べたが, そうした回避について述べた文献は見当たらなかった。

*3-2) ヤモリ (*gecko*) とハンセン病あるいは皮膚病との関係づけは広い地域に及んでいる可能性がある。アフリカのどこかわからないが, 寝ている人の上をヤモリが走ると, その人はハンセン

病になると, 考えられているという (Loveridge 1947⁵³)。またポルトガルでは, いろいろなバリエーションがあるが, ヤモリの触れた食べ物を食べると皮膚病になると考えられているという (Ceriaco et al 2011⁵⁴)。あるいはインドのパンジャブではヤモリ, 特にその尿に触れるとハンセン病になると信じられているという。またウッター・プラデシュには「ヤモリを食べるとハンセン病になる。食べないと飢えたまま」ということわざがあるという (Frembgen 1996⁵⁵)。このヤモリは, カウティリヤの『実利論』(14.1.19-20)にでてくる「家蜥蜴」と同じものかもしれない。少なくともポルトガルからインドまで, ヤモリをめぐる類似した考え方があると推測される。

*3-3) 蛇の使用はエジプトに限らない。Chowhan & Chopra (1938)⁵⁶ はインドでコブラの毒を用いた治療法があることを記し, 実際に試している。彼らは蛇の肉や血の使用についても触れている。

【文献】

- 1-1. 若林佳史 (2013) 中国におけるハンセン病に関する心理社会研究と健康教育研究: 文献綜述. 『社会情報学研究』(大妻女子大学紀要・社会情報系), 22: 73-105.
- 1-2. 若林佳史 (2014) 南アジアにおけるハンセン病に関する心理社会研究と健康教育研究: 文献綜述. 『社会情報学研究』(大妻女子大学紀要・社会情報系), 23: 77-120.
- 1-3. 若林佳史 (2016) 東アフリカにおけるハンセン病に関する心理社会研究と健康教育研究: 文献綜述. 『社会情報学研究』(大妻女子大学紀要・社会情報系), 25: 31-48.
- 1-4. 若林佳史 (2017) 西部アフリカにおけるハンセン病に関する心理社会研究と健康教育研究: 文献綜述. 『社会情報学研究』(大妻女子大学紀要・社会情報系), 26: 35-58.
- 1-5. 若林佳史 (2018) 中部アフリカおよび南部アフリカにおけるハンセン病に関する心理社会研究と健康教育研究: 文献綜述. 『社会情報学研究』(大妻女子大学紀要・社会情報系), 27: 13-37.
- 1-6. Vivancos G, García A, Cabeza ML, Alvarado A, Díaz A, Capote L (1987) La lepra en Santa Cruz de Tenerife. Estudio de 25 años de su endemia 1960-1985. *Fontilles: Revista de Leprología*, 16(2): 191-

- 197.
- 1-7. Campos B (2003) La leprosería de Tenerife. Principio y fin de un proyecto inacabado. *Sureste*, 5: 38–48.
- 1-8. Agis DF, Ortega HH (2017) Las ruinas de la exclusión. La leprosería inacabada de Arico. *Eikasía: Revista de Filosofía*, 75: 69–79.
- 2-1-1. Martín Hinds, el-Said Badawi (1986) *A Dictionary of Egyptian Arabic : Arabic-English*. Librairie du Liban.
- 2-1-2. Browne SG (1975) Some aspects of the history of leprosy: the leprosie of yesterday. *Proc R Soc Med*, 68(8): 485–493.
- 2-1-3. Nunn JF (1996) *Ancient Egyptian Medicine*. British Museum Press, pp.74–75.
- 2-1-4. Smith EG, Derry DE (1910) Anatomical report. *Archaeological Survey of Nubia Bulletin*, 6: 9–30.
- 2-1-5. Møller-Christensen V, Hughes DR (1966) An early case of leprosy from Nubia. *Man* (New Series), 1(2): 242–243.
- 2-1-6. Dzierzykraj-Rogalski T (1980) Palaeopathology of the Ptolemaic inhabitants of Dakhleh Oasis (Egypt). *J Human Evol*, 9(1): 71–74.
- 2-1-7. Sandison AT, Tapp E (1998) Disease in ancient Egypt. Cockburn A, Cockburn E, Reyman TA (eds) *Mummies, Disease and Ancient Cultures*, 2nd ed. Cambridge University Press, pp.38–58.
- 2-1-8. Lucretius (n.d.) *De Rerum Natura*. 6.1114. <Perseus Digital Library: <http://www.perseus.tufts.edu/hopper/text?doc=Perseus%3Atext%3A1999.02.0130%3Abook%3D6%3Acard%3D1090>> [藤沢令夫・岩田義一訳「事物の本性について」『世界古典文学全集 21』筑摩書房]
- 2-1-9. Pliny the Elder (n.d.) *Naturalis Historia*. 26.5. <Perseus Digital Library: <http://www.perseus.tufts.edu/hopper/text?doc=Plin.+Nat.+26.5&fromdoc=Perseus%3Atext%3A1999.02.0138>>
- 2-1-10. Galen (n.d.) *Galenus linguarum seu dictionum exoletarum Hippocratis explicatio*. Kühn CG (ed) *Claudii Galeni opera omnia*, vol.19, p.153.
- 2-1-11. Galen (n.d.) *Ad Glausonem de medendi methodo*. Kühn CG (ed) *Claudii Galeni opera omnia*, vol.11, p.142.
- 2-1-12. Grmek MD (1983) *Les Maladies à l'Aube de la Civilisation Occidentale*. Payot.
- 2-1-13. Holman SR (1999) Healing the social leper in Gregory of Nyssa's and Gregory of Nazianzus's "περί φιλοπρωχίας". *Harvard Theological Review*, 92(3): 283-309
- 2-1-14. Josephus (n.d.) *Contra Apion*. *Josephus*, I. with an English translation by H. St. J. Thackeray (The Loeb classical library, 186). William Heinemann, G.P. Putnam's Sons, 1926. [秦剛平訳『アピオンへの反論』山本書店, 1977]
- 2-1-15. Manetho (n.d.) *Aegyptiaca*. *Manetho*. with an English translation by W.G. Waddell. (The Loeb classical library, 350). Heinemann, Harvard University Press, 1940.
- 2-1-16. Miller TS, Nesbitt JW (2014) *Walking Corpses: Leprosy in Byzantium and the Medieval West*. Cornell University Press.
- 2-1-17. The Leprosarium of Neshu el Bahari, Behera, Egypt. (April 1, 1937) *Journal of Tropical Medicine and Hygiene*, 40: 80–81.
- 2-1-18. Dalgamouni MAK (1938) The Antileprosy Campaign in Egypt. *Int J Lepr*, 6(1): 1–10.
- 2-1-19. Garas M (2000) Commitment to leprosy patients in Egypt. *Zeitschrift Behinderung und Dritte Welt*, 11(3): 110–112.
- 2-1-20. Wiens C (2009) Leprosy Colony Abu Zaabal in Egypt. <<https://claudiawiens.wordpress.com/tag/bakterielle-erkrankung/>>
- 2-1-21. World Health Organization (1988) *Report of the Consultation on Leprosy Control within Urban Primary Health Care. Alexandria, 14-17 November 1988*. World Health Organization.
- 2-2-1. Toweir AA, Chaudhary RC (2000) Review of leprosy cases in Benghazi, Libyan Arab Jamahiriya, 1994–98. *East Mediterr Health J*, 6(5–6): 1098–1102.
- 2-2-2. Caruana J (2014) *The Maltese Missionary Experience: Go and Teach all Nations*. Self-published.
- 2-3-1. Ahmed Ben Miled [traduite par Abdelkader Klibi] (2012) *Histoire de la Médecine Arabe en Tunisie durant Dix Siècles*. Cartaginoiseries.
- 2-3-2. Nouri M, Ben Mosbah TA, Gaumer B, Jomaa B (1986) Les étapes historiques de la lèpre en Tunisie. *Acta Leprol*, 4(2): 155–159.
- 2-3-3. Djelloul N (2009) Lèpre et léproseries en Ifriqiya

- au Moyen Âge. Ahmed El Bahi (ed) *Kairouan et sa Région : nouvelles découvertes, nouvelles approches*. Miskiliani, pp.187-204.
- 2-3-4. Dols MW (1979) Leprosy in Medieval Arabic Medicine. *Journal of History of Medicine and Allied sciences*, 34(3): 314-333.
- 2-3-5. Dols MW (1983) The Leper in Medieval Islamic Society. *Speculum*, 58(4): 891-916.
- 2-3-6. Dols MW (1987) The origins of the Islamic hospital: myth and reality. *Bulletin of the History of Medicine*, 61(3): 367-390.
- 2-3-7. Hakim BS (1988) *Arabic Islamic Cities. Building and planning principles*, 2nd ed. Kegan Paul International. [佐藤次高監訳『イスラーム都市：アラブのまちづくりの原理』第三書館]
- 2-3-8. Hamarneh S (1962) Development of hospitals in Islam. *Journal of the History of Medicine and Allied Sciences*, 17(3): 366-384.
- 2-3-9. Montague J (1973) Notes on medical organization in nineteenth-century Tunisia: a preliminary analysis of the materials on public health and medicine in the Dar El Bey in Tunis. *Medical History*, 17(1): 75-82.
- 2-3-10. Gaumer B (1989) Aspect épidémiologique de l'histoire de la lèpre en Tunisie à l'époque contemporaine. *Revue de l'Institut des Belles Lettres Arabes*, 52(163): 23-38.
- 2-4-1. Gemy, Raynaud L (1897) *Étude sur la Lèpre en Algérie et plus spécialement à Alger : Mesures prophylactiques*. Torrent.
- 2-4-2. Montpellier J (1918) *Pathologie Algérienne. La question de la lèpre en Algérie et plus particulièrement à Alger*. Imprimerie S. Stamel. <<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k57242250.texteImage>>
- 2-4-3. Raynaud L (1925) La lèpre en Algérie. *Bulletin Mensuel de l'Office International d'Hygiène Publique*, 17: 623-626.
- 2-4-4. Boudghene-Stambouli O, Merad-Boudia A (1989) Réflexions sur la lèpre en Algérie. A propos d'un cas autochtone dans la Wilaya de Tlemcen, Algérie. *Acta Leprol*, 7(1): 25-27.
- 2-5-1. Marie PEFS (1935) La lèpre au Maroc. *Int J lepr*, 3(3): 315-326.
- 2-5-2. Harrell RS (1966) *A Dictionary of Moroccan Arabic: Moroccan-English*. Georgetown University Press.
- 2-5-3. Ministère de la santé, Royaume du Maroc. *Guide de la Lutte Antilépreuse. Programme National de Lutte contre la Lèpre*. <www.sante.gov.ma/.../Images/.../Guide%20ANTI-LEPREUSE.pdf>
- 2-5-4. Raynaud L (1902) *Étude sur l'Hygiène et la Médecine au Maroc : Suivie d'une notice sur la climatologie des principales villes de l'Empire*. Leon. <<https://archive.org/details/b24863907/page/1>>
- 2-5-5. 並里まさ子, 小川秀興 (1998) モロッコ王国におけるハンセン病対策—疫学的現状と独自の多剤併用療法について—. 『医療』, 52(12): 754-758.
- 2-5-6. 笹川陽平 (2015) —モロッコ訪問記—ハンセン病制圧活動. 『始良野』 2015 年陽春号 : 6-12.
- 2-5-7. Bakrī, Abū 'Ubayd 'Abd Allāh ibn 'Abd al-'Azīz. [traduite par Mac Guckin de Slane] (1858) *Description de l'Afrique septentrionale*. Imprimerie Impériale. アラビア語 : <<https://archive.org/details/descriptiondelaf00bakr/page/n3>>, フランス語訳 : <<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k56091900/>>
- 2-5-8. Leo Africanus [translated by John Pory, edited by Robert Brown] (1896) *The History and Description of Africa and of the Notable Things therein Contained*, vol.1. Printed for the Hakluyt Society. <<https://archive.org/details/historyanddescr03porygoog/page/n354>>
- 2-5-9. Lambert P (1868) Notice sur la ville de Maroc. *Bulletin de la Société de Géographie* (Cinquième série), pp.430-447. 本文 : <<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k37693r/>>, 地図 : <<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8446712n>>
- 2-5-10. Toro Cano F (1935) El problema de la lepra en Marruecos occidental español. *Medicina de los Países Cálidos*, 8: 85-103.
- 2-5-11. Solsona Conillera J (1962) Del maestro-sangrador al médico. El trabajo y la generosidad de España en la evolución sanitaria de Marruecos. *Archivos del Instituto de Estudios Africanos*, 64: 7-35.
- 2-5-12. Cuadras PM (2014) Memorias de un médico en el Protectorado español de Marruecos a mediados del siglo XX. *Revista Aldaba*, 39: 207-270.

- 2-6-1. Ousmane Moussa Diagana (2011) *Dictionnaire Soninké-Français (Mauritanie)*. Karthala.
- 2-6-2. Sovereign Military Hospitaller Order of St. John of Jerusalem of Rhodes and of Malta (2019) *Activity Report 2019*. <http://www.orderofmalta.org.uk/downloads/activity_report_2019.pdf>
- 2-6-3. Delinotte H (1939) The fight against leprosy in the French overseas territories. *Inter J Lepr*, 7(4): 517–547.
- 2-6-4. Ramos JM, Romero D, Belinchón I (2016) Epidemiology of Leprosy in Spain: The Role of the International Migration. *PLoS Negl Trop Dis*, 10(3): e0004321.
- 3-1-1. Flower SS (1933) Notes on the recent reptiles and amphibians of Egypt, with a list of the species recorded from that kingdom. *Proc Zool Soc*, 103(3): 735–851.
- 3-1-2. Cottam R, Cottam L (1923) Some native superstitions about the white-spotted gecko lizard with notes on its habits. *Sudan Notes and Record*, 6(1): 40–50.
- 3-1-3. Hansen NB (2003) Leaping lizards!: “Poison” geckos in ancient and modern Egypt. Zahi Hawass (ed) *Egyptology at the Dawn of the Twenty-first Century: Proceedings of the Eighth International Congress of Egyptologists, Cairo, 2000*, vol.2. American University in Cairo Press, pp.290–297.
- 3-1-4. Despott G (1915) The reptiles of the Maltese Islands. *The Zoologist* (4th series), 19: 321–327.
- 3-1-5. Jackson JG (1809) *An Account of the Empire of Marocco, and the District of Suse; Compiled from miscellaneous observations made during a long residence in and various journies through, these countries. To which is added, an accurate and interesting account of Timbuctoo, the Great Emporium of Central Africa*. <https://archive.org/stream/accountofempireo00jack/accountofempireo00jack_djvu.txt>
- 3-1-6. Westermarck E (1926) *Ritual and Belief in Morocco*, II. Macmillan, p.343.
- 3-1-7. Gadelrab SS (2010) Medical healers in Ottoman Egypt, 1517-1805. *Medical History*, 54(3): 365–386.
- 3-1-8. Walker J (1931) Folk-medicine in modern Egypt. *The Moslem World*, 21: 6–13.
- 3-2-1. Jomaa B (1986) Lèpre en Tunisie. *Acta Leprol*, 4(2): 141–153.
- 3-2-2. Mohareb R, Salama N, el-Akkad M, Kamel S (1992) Leprosy control in the Gharbia Governorate of Egypt. *Lepr Rev*, 63(4): 377–378.
- 4-1-1. Dessoki HH, Soltan MR, Ezzat AA (2018) Psychiatric comorbidity among male patients with leprosy and its relation to low levels of free testosterone. *Middle East Current Psychiatry*, 25(4): 145–149.
- 5-1. Skoda F (1988) *Médecine ancienne et métaphore : le vocabulaire de l'anatomie et de la pathologie en grec ancien*. Peeters, pp.232–234.
- 5-2. Silla E (1998) *People are not the same: leprosy and identity in twentieth-century Mali*. Heinemann, James Currey.
- 5-3. Loveridge A (1947) Revision of the african lizards of the family gekkonidae. *Bulletin of the Museum of Comparative Zoölogy at Harvard College*, 98(1): 1–469. <<https://archive.org/details/bulletinofmuseum98harv>>
- 5-4. Ceriáco LMP, Marques MP, Madeira NC, Vila-Viçosa CM, Mendes P (2011) Folklore and traditional ecological knowledge of geckos in Southern Portugal: implications for conservation and science. *Journal of Ethnobiology and Ethnomedicine*, 7: 26.
- 5-5. Frembgen JW (1996) The folklore of geckos: ethnographic data from South and West Asia. *Asian Folklore Studies*, 55: 135–143.
- 5-6. Chowhan JS, Chopra RN (1938) The use of cobra venom innerve leprosy. *Ind Med Gaz*, 73(12): 720–725.

Leprosy-affected persons in North Africa: A literature review

YOSHIFUMI WAKABAYASHI

School of Social Information Studies, Otsuma Women's University

Abstract

I carried out a literature review as to how leprosy has been viewed and how the leprosy-affected persons have been dealt with in North Africa. It is found out that the literature concerned are scarce. So it is considered that the basic psychosocial research and health education research targeting the affected persons, their families, and medical and health care workers involved with them are needed.

Key Words (キーワード)

Leprosy (ハンセン病), Hansen's disease (ハンセン病), North Africa (北部アフリカ), Maghreb (マグレブ), Literature review (文献综述)